コード No. 21-NPF-001

提出日：令和 4 年 5 月 15 日

「北東アジアの平和構築に寄与する「大学生交流」の基盤づくり」
令和３年度報告書

KOREA こどもキャンペーン
事務局：宮西有紀

１．プログラム（事業）の目的

KOREA こどもキャンペーンは、1995 年に朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)で起きた自然災害の緊急支援のために結成された。

団体の目的に、「朝鮮民主主義人民共和国のこどもたちへの持続的支援と、日朝両国の友好親善、21 世紀の北東アジアの平和構築に市民の立場として寄与する」ことを掲げており、この平和構築には対話の姿勢が不可欠で、対話の場としての「市民交流」の機会を増やすこと、そこに北朝鮮を含めていくことが、現状改善の手段と考えている。

2012 年から実施してきた日本の大学生が訪朝し北朝鮮の大学生と交流する事業では、互いの立場に配慮しつつも、この地域の平和な未来をテーマに話し合えるほどに発展した。参加した学生が、日朝間の課題だけでなく、地域情勢や在日コリアンの存在など、より広く関心を持つようにもなり、こうした交流と学びが平和構築に大きく寄与するとの実感を得ている。

本事業では、これまで深めた各地域とのネットワークと信頼関係を活かし、日朝を軸にした「東北アジア大学生平和交流プログラム」を企画・実施することで、この地域の平和構築に関心を持つ学生のコミットメントを高めることを目的としている。また、このプログラムを実施しながら組織基盤の強化を図ることで、「北東アジアの平和構築に市民として寄与する」という当キャンペーンの目的達成につながる事業が安定的・持続的に実施できることを目指す。

２．主な活動内容・スケジュール

・オリエンテーション　1 回
・勉強会　4 回
・フィールドワーク　2 回
・振り返りの会　1 回

年月	実施内容
7 月	●「大学生平和交流プログラム」企画立案 協力者の米田伸次氏および李明哲氏と話し合いながら企画を立案した。 ●7/28　オリエンテーション プログラムの目的や予定などを説明後、講師から在日コリアンに関する基礎情報をレクチャー。その後、少人数に分かれて感想を共有しあうワークを数回行った。 場所：Zoom

	講師：李明哲（関西学院大学非常勤講師） 参加学生：学部生８名、院生１名
8 月	<u>●8/25　第１回勉強会</u> テーマ：「関東大震災と朝鮮人虐殺」 朝鮮大学校の朝日/日朝友好大学生ネットワークと当プログラム参加学生の有志が合同企画した学習会「関東大震災と朝鮮人虐殺」について、個人の感想などを中心に発表した後、講師から補足の講義を受けてから、二組に分かれて意見交換を行った。 場所：Zoom 講師：石坂浩一（立教大学教員） ゲスト：朴賛星（朝鮮大学校外国語学部英語学科４年） コメンテーター：米田伸次（日本ユネスコ協会連盟顧問）、李明哲（関西学院大学非常勤講師） 参加学生：学部生８名、院生２名
10 月	<u>□インターン活動開始（～3 月まで）</u> 朝鮮半島情報の収集やまとめ、勉強会報告書作成、子ども絵画展（福岡展）への作品貸出、子ども絵画展さいたま展見学とブログ記事執筆などを担う。
11 月	<u>●11/7　連続勉強会「なぜ朝鮮人虐殺は起こったのか？」①</u> テーマ：「明治日本の国民教化と植民地支配」 事前資料をもとにした発題者の発表後、参加者による追加質問・感想を経て、講師が明治以降の日本人の朝鮮観が植え付けられた背景について解説。その後、二組に分かれて、意見交換を行った。 場所：Zoom 講師：石坂浩一（立教大学教員） コメンテーター：米田伸次（日本ユネスコ協会連盟顧問） 参加学生：学部生５名、院生２名
12 月	<u>●12/4　連続勉強会「なぜ朝鮮人虐殺は起こったのか？」②</u> テーマ：「日本歴史学会の朝鮮停滞史観」 発題者による発表後、講師が研究者による「朝鮮停滞史観」や朝鮮人虐殺への批判、虐殺が起こる試論を解説。その後、平場で参加同士が意見交換を行った。 場所：Zoom 講師：石坂浩一（立教大学教員） コメンテーター：李明哲（関西学院大学非常勤講師）、今井高樹（日本国際ボランティアセンター代表理事） 参加学生：学部生７名（ほか、高校生１名）
1 月	<u>●1/12　連続勉強会「なぜ朝鮮人虐殺は起こったのか？」③</u> テーマ：「戦後の震災犠牲者を追悼する動き」 発題者による発表後、講師から抗議運動や人権救済に関して補足レクチャー。その後、平場で参加同士が意見交換を行った。 場所：Zoom 講師：石坂浩一（立教大学教員） コメンテーター：米田伸次（日本ユネスコ協会連盟顧問）、李明哲（関西学院大学非常勤講師） 参加学生：学部生７名、院生１名（ほか、高校生１名）

2 月	**●2/12 大阪フィールドワーク** 生野の地域史を学びながら、鶴橋駅前で起きたヘイトスピーチ当日の話も伺い、地域や人をとおして国や民族間の歴史の重みを実感する機会となった。 場所：生野コリアタウン、国際市場 講師：李明哲（関西学院大学非常勤講師） 参加学生：7 名（関西 4 名・関東 3 名） **□2/11～2/13　南北コリアと日本のともだち展・大阪展** 大阪フィールドワーク参加の学生が子ども絵画展の会場ボランティアにも携わる。13 日実施のワン・ワールド・フェスティバルとのタイアップでは、絵画展会場を紹介するレポーターとしてライブ配信に参加した。
3 月	**●3/2 埼玉フィールドワーク** 埼玉と朝鮮半島の古代からのつながりを学ぶとともに、丸木美術館では《原爆の図》を見て「いのち」について真剣に考える場となった。 場所：高麗神社・聖天院、吉見百穴の地下軍事施設跡、丸木美術館 講師：小川満（元埼玉県立越ケ谷高校教諭、「埼玉・コリア 21」事務局長） 参加学生：5 名（関東 4 名・関西 1 名） **●3/29 振り返りの会** 参加学生：学部生 5 名、院生 1 名 場所：Zoom 事務局から、プログラムの意図や勉強会の目的を説明した後、1 年を振り返り、印象に残ったことやいまの関心ごとなどを話し合った。

３．助成を受けた活動の報告　（様子がわかる写真等があれば貼付してください）

長引くコロナ禍で、2021 年も海外訪問が出来ず、日朝や日韓の「交流」は実現出来なかったため、引き続き、勉強会やフィールドワークの国内活動を実施した。

１）事務局＋大学教員＋学生の運営体制

2021 年 6 月に「南北コリアと日本のともだち展」事業の大きな行事（20 周年記念絵画展）があったため、6 月までは 2020 年度インターンが活動を延長し、2021 年度インターンは 10 月から 3 月までの期間での運営体制となった。

訪朝経験者（アルムナイ）とは、連携して「日朝大学生交流」の報告書づくりを進めており、2022 年の 5 月中には完成する予定。

また、アドバイザーとはプログラムの方向性について議論する場を持ったり、教員サポーターとは勉強会の内容や進め方を都度相談し、適宜コンタクトを取り、アドバイスをもらうようにした。

2021 年度インターン修了式の様子

2） 新しい資金獲得に向けてのアプローチ

コロナ禍により、引き続き、海外訪問も見込めず、活動も国内に制限されたため、新たにアプローチしようと考えていた助成金申請に動くことが出来なかった。

訪朝経験者（アルムナイ）と連携して進めている「日朝大学生交流」報告書の完成後には、それを広報ツールとして、今後のファンドレイズに活かしていく。

KOREA こどもキャンペーン活動記録の書籍化は、少し遅れているが、プロジェクトは進行中。

3） 「東北アジア大学生平和交流プログラム」の実施

2021 年度は、大学生・大学院生 13 名でプログラムをスタートした。少人数ではあったが、現代においても未だに起きている在日コリアンへのヘイトクライムを今後なくすためには、なぜ加害者が生まれるのかを知りたいという参加学生の希望から、初めての試みとして、ひとつのテーマを深堀りする形で勉強会を進めた。きっかけは、8 月の第 1 回勉強会で「関東大震災での朝鮮人虐殺」を取り扱った際に、参加学生から「現代日本社会にも通ずる」「再び同じ惨事が起こる可能性がある」という感想があり、特に、「普通の人が加害者になる可能性がある」という問題意識が生まれたことである。

そこで、【同じ歴史を繰り返さないために「日本の近代」という時代を捉える】を年間テーマとして掲げることになった。そして、日本による植民地支配をマジョリティの視点から考えてみるために、あえて、権力を持った立場であった「大日本帝国の置かれた状況」を主軸に、【日本人の朝鮮観】から偏見や差別を生み出す政策と構造について考える連続シリーズ「なぜ朝鮮人虐殺は起こったのか？」を 3 回実施した。

フィールドワークは、状況を見て 1 回だけ行う予定だったが、勉強会をオンラインで実施するなかで対面による出会いの重要性を感じ、2 月には大阪、3 月には埼玉で実施する機会を得た。大阪フィールドワークの最後には、オンラインでも報告会を行い、フィールドワークに参加出来なかった学生にも経験を共有した。

＜勉強会＞

8/25 第 1 回勉強会（ゲストの朝鮮大学校生）

12/4 連続シリーズ②（発題者による発表）

＜大阪フィールドワーク＞

鶴橋商店街の成り立ちを聞く参加者たち

ヘイトスピーチ当日の話に耳を傾ける参加者たち

＜埼玉フィールドワーク＞

高麗神社で記念撮影

吉見百穴の地下軍事施設跡

４．活動の成果　（成果物などがありましたらご紹介ください）

１）学生たちのコミットメント

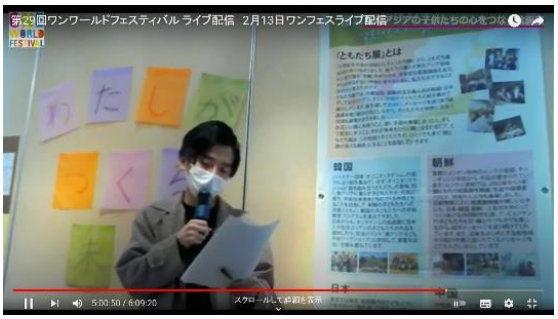
2021 年度の最も大きな特徴は、第１回の学習会で出た学生の感想をきっかけに、年間を通してひとつのテーマを捉え、それを各回で深堀りする形で勉強会を進めたことである。その中で、学生たちが交代で発題者を担い、講師がそれを補い、その後、在日コリアンのアドバイザーなどの参加も得て、忌憚のない意見交換を行いながら進めてきた。

毎回、勉強会の冒頭で年間テーマの意味やその経緯などを説明するようにし、学生同士の意見交換の際には、在日コリアンのアドバイザーにコメントをもらうなど、丁寧に進めるようにしたところ、意見交換も活発化してきた。大学院生も学部生にコメントするなど、意見交換に一役買っており、「経験者がリードする」流れは出来てきた。

特に、インターンや学生リーダー経験者は、大学院への進学や就職した後でも行事への参加率が高く、活動に関わり続けている。また、過去に事務局とコミュニケーションを多く取った学生は、朝鮮大学校の朝日/日朝友好大学生ネットワークとの合同企画（「関東大震災と朝鮮人虐殺」に関連する学習会とフィールドワーク）を運営したり、勉強会での発表者や発題者を引き受けるなど、プログラムへのコミットメントも高い。

また、学生たちは、勉強会に参加するだけでなく、子ども絵画展を知らせる役割を主体的に担い、地域の平和づくりの発信側ともなっている。

北朝鮮や韓国との交流は実現出来なかったが、「プログラムに参加している、ほかの学生の話を聞くだけでも刺激になる」という声はある。そのため、次年度は、多様なバックグランドを持つ学生やゲストにも参加してもらい、参加者との交流から学びを得る機会とする。



大阪展（絵画展）とワン・ワールド・フェスティバルとのタイアップで会場から行われたライブ配信には、大学生プログラムに参加している学生たちがレポーターとして活躍した。

２）アドバイザーとの連携

「日本歴史学会の朝鮮停滞史観」を取り扱った 12 月の勉強会（連続シリーズ②）では、学生から「虐殺もヘイトスピーチも、対岸の人は見ているだけ」「“普通の人が加害者になる”ということは、傍観者が加害者になる可能性がある」という意見が出て、さらにある学生の「在日コリアンが差別を受けていることを知っていても、声をあげることが出来ない。声をあげないことが悪い、となると、余計議論が出来なくなるのでは。“傍観者”になりたいわけではなく、日本人側として何をしたらいいのか。」という発言から、「当事者性」の捉え方について議論が

発展した。その際、講師の「どの属性に属している、というなかで特権を持ってしまうことがある」という言葉を受けて、在日コリアンのアドバイザーが「属性の特権に無自覚にならない。と同時に、属性の責任に押しつぶされない」というコメントを残した。3 月に実施した振り返りの会で、「印象に残ったこと」として、このコメントを挙げる学生が多く、在日コリアンのアドバイザーの存在は、学生にも大きく影響を与えている。

アドバイザーとは、もっと密に連携を取って、学生には、多様なバックグランドを持つ学生やゲストの意見を聞くことで学びとする機会を得られるようにしていく。

５．今後の課題

大学生交流プログラムの参加学生は、加害の歴史を学び、意見を交換しあうなかで現在のヘイトクライムまで起きている状況をどう克服するかに真剣に向き合っている。しかし、これらの意義を日本社会に示していく訴求は十分とは言えず、新たな広がりを見いだせないまま現在に至っている。

対面での交流が再開するまでに、これまでの成果やネットワークを最大限に活用して市民交流の意義を伝え共感者を増やすと同時に、より交流が意義あるものとなるよう歴史や社会の問題について学びを深めておくことが必要である。

以上